

地域生活移行による居住環境の変化に伴う 知的障害者の生活満足度の比較に関する研究

モリチ トオル ムラオカ ミユキ ミズシマ トモアキ
森地 徹*¹ 村岡 美幸*² 水嶋 友昭*³

目的 昨今の日本の障害者政策において、その政策課題に掲げられている障害者入所施設からの地域生活移行のうち、知的障害者入所施設からの地域生活移行において、地域生活移行が移行者の生活満足度に及ぼす影響を検証することを本研究の目的とする。

方法 Healらによって作成された生活満足度尺度であるLifestyle Satisfaction Scale (LSS) の28項目を用いて、同一施設の入所者で地域住居に移った群（以下、地域群）と入所施設に残った群（以下、施設群）の生活満足度の比較を横断調査により行った。調査は倫理的配慮を行ったうえで実施し、地域群24名と施設群36名から回答を得た。また、分析においては、t検定と数量化Ⅲ類を用いた。

結果 地域群でも施設群でも住居、食事、外出、仕事に対して高い満足度が感じられる様子が認められた。また、地域群では個別での生活が志向される傾向があり、入所施設には戻りたくないと考える傾向があった。

結論 知的障害者入所施設からの地域生活移行に伴い、個別での生活が保障されることで、移行者の生活満足度が高まる可能性がある。そして、個別での生活が保障されることによって移行者の生活満足度が高まり、施設に戻りたくないと考える傾向があった。これらのことから、地域生活移行に際して個別での生活を保障することが移行者の高い生活満足度につながり、そのため取り組みを行うことが必要になると考えられる。

キーワード 地域生活移行、生活満足度、比較研究、ノーマライゼーション理念、個別性

I はじめに

2002年に障害者基本計画と重点施策5カ年計画が示され、施設入所者の地域生活への移行の促進が掲げられ、施設サービスにおいて入所施設は真に必要なものに限定するとされた。また、2006年に障害者自立支援法が成立し、その中で策定されることとなった市町村障害福祉計画の基本指針には、グループホーム等の充実を図り、施設入所・入院から地域生活への移行の推進を図ることが掲げられ、施設入所者の地域生活移

行割合と縮減割合についての数値目標が示された。このように、昨今の日本の障害者政策において、入所施設からの入所者の地域生活移行はその政策課題に掲げられている。

この入所施設からの入所者の地域生活移行は、知的障害者福祉分野において海外でノーマライゼーション理念の具現化のためにその取り組みが先駆的に行われており、関連する研究の蓄積がなされている。その動向を、英国と豪州の研究動向をレビューした論文から概観すると、英国でも豪州でも地域生活移行が移行者に及ぼす

* 1 日本社会事業大学社会事業研究所研究員 * 2 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究係

* 3 ささみらは代表

影響について、移行者の生活満足度などに着目された検証が行われている¹⁾²⁾。

ここでいう生活満足度とはQOLの概念に含まれており、その評価には客観的評価と主観的評価が用いられている³⁾⁴⁾。このQOLの評価において、客観的評価は文化的規範を、主観的評価は個人の価値観による満足度をそれぞれ反映しており⁵⁾⁶⁾、それらの中でも主観的評価の重要性が指摘されている⁴⁾⁶⁾⁻¹¹⁾。しかし同時に、QOLの主観的評価において課題となる条件と傾向が指摘されている。

この課題となる条件とは、回答者が質問を理解し回答できる程度の能力を持つ必要がある³⁾⁵⁾¹⁰⁾というものであり、課題となる傾向とは、回答者が自己報告が可能であってもほとんどの質問に「はい」と回答する黙従傾向がある¹⁰⁾⁻¹³⁾、IQが低くなるにつれて黙従傾向が強くなる¹¹⁾¹⁴⁾、「はい-いいえ」質問は回答しやすいが黙従傾向が強くなる¹⁵⁾というものである。

表1 LSS尺度項目

<ol style="list-style-type: none"> 1. ここ（今住んでいる場所）に住んでみてどうですか？ 2. 住むのにもっと適した場所がありますか？ 3. ここ（今住んでいる場所）に住む前はどこに住んでいましたか？ 前に住んでいた場所が良いですか？ここが良いですか？ 4. ここ（今住んでいる場所）の食事はおいしいですか？ 5. （住む場所で）食事もっとおいしい場所がありますか？それはどこですか？ 6. ここ（今住んでいる場所）では誰と一緒にですか？ 誰かと一緒に良いですか？1人が良いですか？ 7. 誰かと一緒に住みたいですか？ 8. 住んでいる地域のことが好きですか？ 9. 住むのにもっと良い地域がありますか？ 10. 休みの日にすることは楽しいですか？ 11. 休みの日にすることはありますか？ 12. 休みの日をもっと楽しみたいですか？ 13. 友だちがたくさんいますか？ 14. もっと友だちが欲しいですか？ 15. （住むところで）もっと友だちができる所がありますか？ 16. 友だちとよく会っていますか？ 17. 支援者のことが好きですか？ 18. 診療所で診てもらうのが好きですか？ 19. 洗濯をしてもらうのが好きですか？ 20. バスや車に乗って出かけるのが好きですか？ 21. この辺の食料品店やお店に行くのが好きですか？ 22. クラブ活動をしていますか？ クラブ活動は好きですか？クラブ活動をしたいですか？ 23. 仕事をしていますか？ 仕事は好きですか？仕事をしたいですか？ 24. 診療所で診てもらったり、バスや車に乗って出かけたり、お店で買い物をしたりすることをサービスを使うといいます。サービスを使うことは好きですか？ 25. ここ（今住んでいる場所）での約束は何ですか？ その約束が好きですか？ 26. その他の約束はありますか？ その約束が好きですか？ 27. ここ（今住んでいる場所）に住むのが好きですか？ 28. 前に住んでいた所に戻りたいですか？
--

このように、課題となる条件や傾向がありながら、海外において知的障害者入所施設からの地域生活移行が検証される際に着目されている生活満足度であるが、日本では現在まで、施設入所者、グループホーム入居者、在宅生活者の生活満足度の比較は行われているものの¹⁶⁾、地域生活移行に際しての移行者の生活満足度の検証は行われていない。そのため、地域生活移行に際しての移行者の生活満足度を検証し、その結果を地域生活移行支援とその後の地域生活支援に反映させることが必要になると考えられる。

Ⅱ 方 法

(1) 調査期間と対象

調査は2007年10月から12月にかけて実施した。その際、調査対象を同一の知的障害者入所施設の入所者で、2003年10月から2007年10月までの間に地域住居に移った群（以下、地域群）28名と、入所施設に残った群（以下、施設群）45名とし、その中で調査への同意が得られた者とした。これらのうち最終的に調査対象となったのは、地域群が28名中24名（回答割合85.7%）、施設群が45名中36名（回答割合80.0%）であった。

(2) 調査方法

調査は前述の黙従傾向を避けるためにHealらによって作成された生活満足度尺度であるLifestyle Satisfaction Scale (LSS)¹⁷⁾の項目28項目（表1）を用いて、地域群と施設群の両群の当事者に対して調査者が聞き取り形式による横断調査で行った。その際、LSSの項目は、一部現実に即した形に表現を置き換えた。具体的には、「自由時間 (free time)」を「休みの日」に、「歯科医 (dentist)」を「診療所」に、「洗濯施設 (laundry facility)」を「洗濯をしてもらうこと」に、「タクシーサービス (taxi service)」を「バスや車に乗って出かけること」に、「講義 (classes)」を「クラブ活動」にそれぞれ置き換えた。また、調査に先立って対象者の状態に関する聞き取りを支援者に対して行い、コ

コミュニケーション等配慮すべき点を確認した上で調査を実施した。なお、倫理的配慮として、調査対象者に調査協力が任意であり、調査協力により不都合が生じないことを説明した上で、調査同意を得られた場合に限り回答を依頼した。

(3) 分析方法

分析においてはt検定と数量化Ⅲ類を用いた。その際、t検定では、各項目において「肯定的意見」を3点、「どちらともいえない・わからない」を2点、「否定的意見」を1点として得点化を行った。そして各項目の平均点の差について、地域群と施設群の間で比較を行った。一方、数量化Ⅲ類では、各項目の反応の類似性を抽出するために分析を行い、特徴を示す項目をグループ化してそれぞれのグループの意味づけを行った。その際、調査項目においては極端に度数分布に偏りがある項目を用いることができないため、度数分布に偏りの少ない項目を採用した。そして、28項目の中で肯定的意見と否定的意見をあわせた56項目のうち20項目(表2)を採用して分析を行った。

表2 数量化Ⅲ類に用いた項目

肯定的意見	否定的意見
今の場所が良い もっと食事がおいしい場所はない 部屋は1人が良い 1人で暮らしたい 住んでいる地域が良い 休みの日は今のままで良い 友達は今のままで良い もっと友達ができる場所はない 友達と会うことができる 診療所で診てもらうのが好き	前の場所が良い もっと食事がおいしい場所がある 部屋は誰かと一緒に良い 誰かと一緒に暮らしたい 友達が欲しい 洗濯してもらうのが好き
クラブ活動は好き 住む場所での約束事が好き 他の約束事が好き 前に住んでいたところに戻りたくない	

表3 調査対象の属性

(単位 名, ()内%)

	地域群 (n = 24)	施設群 (n = 36)
性別		
男性	11 (46)	19 (53)
女性	13 (54)	17 (47)
年齢		
30代以下	- (-)	2 (6)
40代	3 (13)	10 (28)
50	15 (63)	10 (28)
60	5 (21)	13 (36)
70	1 (4)	1 (3)
IQ		
34以下 (重度)	14 (58)	29 (81)
35から49 (中度)	7 (29)	6 (17)
50以上 (軽度)	3 (13)	1 (3)
入所年数		
10年未満	- (-)	2 (6)
10年から20年未満	1 (4)	3 (8)
20年から30年未満	6 (25)	10 (28)
30年から40年未満	17 (71)	21 (58)

Ⅲ 結 果

(1) 属性

地域群と施設群の両群の属性は、地域群では性別で男性が11名、女性が13名、平均(±標準偏差)は年齢が56.8(±6.9)歳、IQが36.0(±12.7)、入所年数が31.9(±5.8)年であった(表3)。一方、施設群では性別で男性が19名、女性が17名、平均(±標準偏差)は年齢が54.7(±9.2)歳、IQが29.0(±9.1)、入所年数が29.6(±8.5)年であった。なお、両群の属性の間に有意差はみられなかった。

(2) 地域群と施設群の得点の比較(単純集計)

地域群では肯定的意見が強く、「今の場所に

住んで満足」「食事がおいしい」などの項目で回答の8割を超えていた(表4)。一方、施設群でも肯定的意見が強く、地域群同様「今の場所に住んで満足」「食事がおいしい」などの項目で回答の8割を超えていた。

これらの項目のうち、地域群と施設群の両群で肯定的意見が強いのが、「今の場所に住んで満足」「食事がおいしい」「バスや車に乗って出かけるのが好き」「仕事が好き」の項目で回答の8割を超えていた。

一方、肯定的意見と否定的意見の割合が逆転している項目をみると、「部屋は1人が良いか」「誰かと一緒に暮らしたいか」の項目で地域群では肯定的意見が強いものの、施設群では否定的意見が強いことがわかった。

表4 地域群と施設群の得点の比較（単純集計）

(単位 名, ()内%)

	地域群 (n = 24)	施設群 (n = 36)		地域群 (n = 24)	施設群 (n = 36)
1. 今の場所に住んでみてどうか			15. もっと友達ができる場所があるか		
満足	21(88)	30(83)	ない	7(29)	5(14)
どちらともいえない	2(8)	5(14)	どちらともいえない	6(25)	16(44)
不満	1(4)	1(3)	ある	11(46)	15(42)
2. 住むのもっと良い場所があるか			16. 友達と良く会うことができるか		
ない	5(21)	11(31)	できる	17(71)	23(64)
どちらともいえない	8(33)	13(36)	どちらともいえない	4(17)	10(28)
ある	11(46)	12(33)	できない	3(13)	3(8)
3. 前の場所が良いか・今の場所が良いか			17. 支援者のことが好きか		
今の場所が良い	14(58)	23(64)	好き	20(83)	27(75)
どちらともいえない	6(25)	7(19)	どちらともいえない	3(13)	8(22)
前の場所が良い	4(17)	6(17)	嫌い	1(4)	1(3)
4. 食事はおいしいか			18. 診療所で診てもらうのは好きか		
おいしい	21(88)	33(92)	好き	16(67)	25(69)
どちらともいえない	1(4)	1(3)	どちらともいえない	3(13)	5(14)
おいしくない	2(8)	2(6)	嫌い	5(21)	6(17)
5. もっと食事がおいしい場所があるか			19. 洗濯をしてもらうのは好きか		
ない	7(29)	14(39)	好き	6(25)	23(64)
どちらともいえない	9(38)	9(25)	どちらともいえない	4(17)	9(25)
ある	8(33)	13(36)	嫌い	14(58)	4(11)
6. 部屋は1人が良いか			20. バスや車に乗って出かけるのは好きか		
1人が良い	18(75)	10(28)	好き	20(83)	31(86)
どちらともいえない	3(13)	9(25)	どちらともいえない	2(8)	4(11)
誰かと一緒に良い	3(13)	17(47)	嫌い	2(8)	1(3)
7. 誰かと一緒に暮らしたいか			21. お店に行くのは好きか		
1人で暮らしたい	16(67)	11(31)	好き	18(75)	34(94)
どちらともいえない	3(13)	9(25)	どちらともいえない	4(17)	2(8)
誰かと一緒に良い	5(21)	16(44)	嫌い	2(8)	-(-)
8. 住んでいる地域はどうか			22. クラブ活動は好きか		
良い	20(83)	21(58)	好き	17(71)	24(67)
どちらともいえない	3(13)	13(36)	どちらともいえない	3(13)	9(25)
悪い	1(4)	2(6)	嫌い	4(17)	3(8)
9. 住むのもっと良い地域があるか			23. 仕事は好きか		
ない	8(33)	6(17)	好き	21(88)	30(83)
どちらともいえない	6(25)	19(53)	どちらともいえない	2(8)	4(11)
ある	10(42)	11(31)	嫌い	1(4)	2(6)
10. 休みの日にすることは楽しいか			24. サービスを利用するのは好きか		
楽しい	20(83)	26(72)	好き	19(79)	28(78)
どちらともいえない	4(17)	8(22)	どちらともいえない	3(13)	7(19)
楽しくない	-(-)	2(6)	嫌い	2(8)	1(3)
11. 休みの日にすることはあるか			25. 住む場所での約束事は好きか		
ある	14(58)	20(56)	好き	20(83)	23(64)
どちらともいえない	3(13)	8(22)	どちらともいえない	3(13)	10(28)
ない	7(29)	8(22)	嫌い	1(4)	3(8)
12. 休みの日をもっと楽しみたいか			26. 他の約束事は好きか		
今のままで良い	9(38)	8(22)	好き	19(79)	21(58)
どちらともいえない	5(21)	10(28)	どちらともいえない	4(17)	14(39)
もっと楽しみたい	10(42)	18(50)	嫌い	1(4)	1(3)
13. 友達がたくさんいるか			27. 今の場所に住むのは好きか		
いる	20(83)	24(67)	好き	20(83)	31(86)
どちらともいえない	3(13)	7(19)	どちらともいえない	3(13)	2(6)
いない	1(4)	5(14)	嫌い	1(4)	3(8)
14. もっと友達が欲しいか			28. 前に住んでいた場所に戻りたいか		
今のままで良い	10(42)	8(22)	戻りたくない	20(83)	22(61)
どちらともいえない	2(8)	9(25)	どちらともいえない	3(13)	7(19)
欲しい	12(50)	19(53)	戻りたい	1(4)	7(19)

これらのことから、地域群と施設群の両群ともに住居、食事、外出、仕事に対して高い満足度を感じているものの、地域群では個人での生活を志向する傾向にあるのに対して、施設群では集団での生活を志向する傾向にあることがわかった。

(3) 地域群と施設群の得点の比較 (t 検定)

t 検定の結果、「部屋は1人が良いか」「洗濯をしてもらうのは好きか」(p < 0.01), 「誰かと一緒に住みたいか」「前に住んでいた場所に戻りたいか」(p < 0.05) の項目で地域群と施設群の平均点の間に有意差がみられ、「洗濯を

してもらおうのは好きか」以外の項目で地域群の生活満足度が施設群に比べて高くなっていた(表5)。なお、「洗濯をしてもらおうのは好きか」という項目について、地域群で自主的に洗

濯を行う機会が増えたため、このような傾向になったと考えられる。

すなわち、施設群では集団での生活が志向され、地域群では個別での生活が志向される傾向があった。また、地域群では施設群に比べて前に住んでいた場所に戻りたくないとする傾向があった。

表5 地域群と施設群の得点の比較 (t検定)

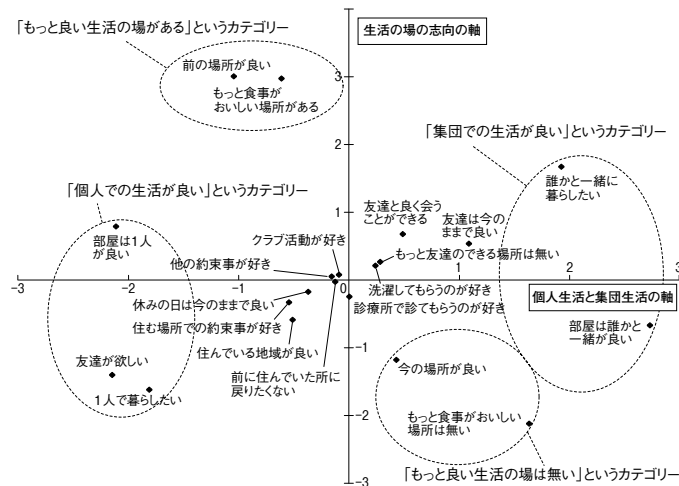
	地域群		施設群		P
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
今の場所に住んでみてどうか	2.8	0.5	2.8	0.5	0.83
住むのにもっと良い場所があるか	1.8	0.8	2.0	0.8	0.30
前の場所が良いか・今の場所が良いか	2.4	0.8	2.5	0.8	0.79
食事はおいしいか	2.8	0.6	2.9	0.5	0.63
もっと食事がおいしい場所があるか	2.0	0.9	2.0	0.9	0.75
部屋は1人が良いか	2.6	0.7	1.8	0.9	0.00**
誰かと一緒に暮らしたいか	2.5	0.8	1.9	0.9	0.01*
住んでいる地域はどうか	2.8	0.5	2.5	0.6	0.06
住むのにもっと良い地域があるか	1.9	0.9	1.9	0.7	0.77
休みの日にすることは楽しいか	2.8	0.4	2.7	0.6	0.19
休みの日にすることはあるか	2.3	0.9	2.3	0.8	0.86
休みの日をもっと楽しみたいか	2.0	0.9	1.7	0.8	0.31
友達がたくさんいるか	2.8	0.5	2.6	0.8	0.11
もっと友達が欲しいか	1.9	1.0	1.7	0.8	0.35
もっと友達ができる場所があるか	1.8	0.9	1.7	0.7	0.60
友達と良く会うことができるか	2.6	0.7	2.6	0.7	0.88
支援者が好きか	2.8	0.5	2.7	0.5	0.72
診療所で診てもらおうのは好きか	2.5	0.8	2.5	0.8	0.75
洗濯をしてもらおうのは好きか	1.7	0.9	2.5	0.7	0.00
バスや車に乗って出かけるのは好きか	2.8	0.6	2.8	0.5	0.57
お店に行くのは好きか	2.7	0.6	2.9	0.2	0.05
クラブ活動は好きか	2.5	0.8	2.6	0.7	0.83
仕事は好きか	2.8	0.5	2.8	0.5	0.68
サービスを利用するのは好きか	2.7	0.6	2.8	0.5	0.68
住む場所での約束事は好きか	2.8	0.5	2.6	0.7	0.15
他の約束事は好きか	2.8	0.5	2.6	0.6	0.19
今の場所に住むのは好きか	2.8	0.5	2.8	0.6	0.92
前に住んでいた場所に戻りたいか	2.8	0.5	2.4	0.8	0.03*

注 **p<0.01, *p<0.05

(4) 地域群と施設群の得点の比較 (数量化Ⅲ類)

数量化Ⅲ類の結果、固有値が1軸で0.130, 2軸で0.112, 3軸で0.086, 4軸で0.079であった。このように、固有値の変化が2軸と3軸の間で大きかったため、分析は1軸と2軸で行った。そして、1軸での解釈では「部屋は1人が良い」「1人で暮らしたい」といった項目が1軸のマイナス方向に、「誰かと一緒に暮らしたい」「部屋は誰かと一緒に暮らしたい」といった項目が1軸のプラス方向にそれぞれ位置することがわかった(図1)。これらのことから、1軸は「個人生活と集団生活」の軸と解釈した。一方、2軸での解釈では「今の場所が良い」「もっと食事がおいしい場所は無い」といった項目が2軸のマイナス方向に、「前の場所が良い」「もっと食事がおいしい場所がある」といった項目が2軸のプラス方向にそれぞれ位置することがわかった。これらのことから、2軸は「生活の場の志向」の軸と解釈した。

図1 分析項目の2軸上の分布 (数量化Ⅲ類・カテゴリースコア)



次に、解釈した軸にサンプルスコアを重ね合わせると、1軸上の分布で施設群のプラス方向とマイナス方向の分布に有意差がみられ、施設群でプラス方向に分布の偏りがみられた。また、1軸上の分布では有意ではなかったが、地域群で、マイナス方向に分布の偏りがみられた。一方、2軸上の分布には施設群、地域群ともに分布に偏りがみられなかった。これらのことから、本研究では1軸上のサンプルス

コアの分布に着目した。

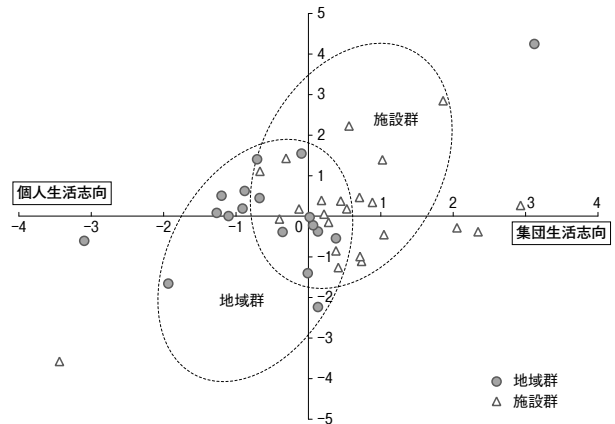
その結果、1軸のマイナス方向の「個人での生活が良い」という方向に地域群が、プラス方向の「集団での生活が良い」という方向に施設群がそれぞれ位置づくことがわかった(図2)。これらのことから、地域群では個人での生活が、施設群では集団での生活がそれぞれ志向される傾向があった。

Ⅳ 考 察

地域群でも施設群でも共に多くの項目で高い生活満足度が示されたが、施設群では集団での生活が志向される傾向にあるのに対して、地域群では個人での生活が志向され、入所施設には戻らないと考える傾向があった。これらのことから、地域群でも施設群でもそれぞれの生活環境が肯定的に受け止められているものの、入所施設と地域生活を比較すると地域生活がより個別性が高く望ましいと考えられている可能性がある。このことは、地域生活を体験することにより地域生活を志向するようになるという調査結果とも一致した¹⁸⁾。また、地域生活移行をした群が施設に残った群よりも住居に対する満足度が高くなるという調査結果¹⁹⁾もあり、地域生活移行に伴う居住環境の変化が移行者の生活満足度の高さに結びつく可能性がある。

このように、地域生活移行により居住環境が変化することで移行者が個別性の高い生活を志向し、入所施設には戻らないという意識を生じさせる可能性を考えれば、地域生活移行に伴う移行者への個室の提供がその大きな要因になると考えられる。このことに関連して、グループホーム入居者に対する調査の中では、今のところで暮らして良かったこととして、自分の部屋ができたことが上位に挙げられている²⁰⁾。そのため、地域生活移行による居住環境の変化において、移行者に個別性の高い生活を保障するために、移行先において移行者に個室が確保されることが重要になると考えられる。

図2 地域群と施設群の得点の比較(数量化Ⅲ類・サンプルスコア)



また、個室の確保とともに、地域生活移行に伴う個別性の高い生活を保障するために重要になるのが、移行者に対する個別支援だと考えられる。実際、グループホーム入居者に対する調査の中で、もっとわかって欲しいこととして、行きたい所へ自由に出かけたい、もっといろんなことを経験したいという項目が上位に挙げられている²⁰⁾。これはグループホーム入居者の社会参加に対して個別支援を行う必要性を示したものだと考えられる。そのため、地域生活移行に伴い移行者に対して個別性の高い生活を保障するためには、社会参加などに対する個別支援を行うことも必要になると考えられる。この個別支援の充足度について、本研究では深く検証が行われなかったため、今後の検証課題としたい。

これらのことから、知的障害者入所施設からの地域生活移行について、比較すべきものがない段階では施設での生活が肯定的に受け止められる傾向にあるものの、地域での生活が経験されると移行後の地域における個別性の高い生活が、入所施設における集団での生活よりも望ましいとされる傾向にあることが考えられる。この結果を踏まえて、今後、移行者の移行後の生活において住居や支援などでいかに個別性が確保されているか、個別性の高い生活が移行者の生活満足度の高さにどの程度つながるのかについて、さらなる検証を行うことが必要になると

考えられる。

V おわりに

知的障害者入所施設からの地域生活移行は、海外では前述のとおりノーマライゼーション理念に基づいて行われている。このノーマライゼーション理念について、Bank-Mikkelsenは「最大限に発達できるようにするという目的のために、障害者個人のニーズに合わせた処遇、教育、訓練を含めて他の市民に支えられているのと同じ条件を彼らに提供することを意味している」²¹⁾とし、Bengt-Nirjeは「場所の物理的基準が一般市民の同種の施設に適用されるのと同様であるべき」²²⁾とし、Wolfensbergerは「可能な限り文化的に通常である身体的な行動や特徴を維持したり確立するために、可能な限り文化的に通常となっている手段を利用すること」²³⁾としている。このように、ノーマライゼーション理念では知的障害者の生活様式が一般の人と同様であるべきことをうたっていることがわかる。そして、ノーマライゼーション理念に基づいた地域生活移行とは、地域生活移行により移行者が一般の人と同様の生活を送ることを目指すための取り組みであると考えられる。そのため、地域生活移行により移行者の生活様式が一般の人の生活様式に近くなることがノーマライゼーション理念に基づいて行われる地域生活移行において必要になると考えられる。

しかし一方で、Bengt-Nirjeが述べているように、地域社会に住んでいるということが社会に統合されているということではなく、知的障害者の生活がその地域の普通の人たちの生活にどの程度まで近づいているか²⁴⁾ということは検証をする必要がある。

そして、同じくBengt-Nirjeが述べているように、地域生活移行に伴う移行者の生活環境について、物理的な環境から安心感という基本的欲求を得る物理的統合から、環境のうち利用したいものを利用する機会を持つ機能的統合、対人関係や一般的な社会関係を持つ社会的統合²⁵⁾へと統合のレベルが上がっているか検証を行う

が必要になると考えられる。

謝辞

本研究における調査は、平成19年度国立のぞみの園法人内研究「知的障害のある人の地域生活移行における生活満足度の把握に関する研究」において実施した。調査にご協力頂いた皆様にあらためて感謝申し上げたい。

文 献

- 1) Emerson E, Hatton C. Deinstitutionalization in the UK and Ireland outcome for service users. *Journal of Intellectual and Developmental Disability* 1996 ; 21(2) : 17-37.
- 2) Young L, Sigafoos J, Suttie J, et al. Deinstitutionalisation of persons with intellectual disabilities: a review of Australian studies. *Journal of Intellectual & Developmental Disability* 1998 ; 23(2) : 155-70.
- 3) Heal LW, Sigelman CK. 知的障害を持つ人のQOLの測定の方法論的議論. 三谷嘉明訳. Schalock RJ. 編. 知的障害・発達障害を持つ人のQOL-ノーマライゼーションを超えて-. 三谷嘉明・岩崎正子訳: 医歯薬出版(株), 1994 ; 137-227.
- 4) Cummins, R. A. 生活の質の評価. 橋本由紀子訳. Brown RI編. 障害をもつ人にとっての生活の質-モデル・調査研究および実践-. 中園康夫・末光茂監訳: 相川書房, 2001 ; 37-137.
- 5) Felce D. 生活の質:用語の広がり and 測定への視点. 渡辺勲持訳. Brown RI編. 障害をもつ人にとっての生活の質-モデル・調査研究および実践-. 中園康夫・末光茂監訳: 相川書房, 2001 ; 68-73.
- 6) Brown RI. 生活の質:概念の発展. 橋本由紀子訳. Brown RI編. 障害をもつ人にとっての生活の質-モデル・調査研究および実践-. 中園康夫・末光茂監訳: 相川書房, 2001 ; 3.
- 7) Goode D. 成人重度障害者の生活の質評価. 村上武志訳. Brown RI編. 障害をもつ人にとっての生活の質-モデル・調査研究および実践-. 中園康夫・末光茂監訳: 相川書房 2001 ; 100.
- 8) 清水直治. 知的障害者の地域社会におけるよりよい生活を支援するために-QOLの概念と評価に関

- する検討. 特殊教育研究施設研究年報 1999 ; 1999 : 37.
- 9) 田中耕一郎. 知的障害者の地域生活支援における主観的QOLへのアプローチ. 北星論集 2006 ; 43 : 72.
- 10) 古屋健・三谷嘉明. 知的障害を持つ人のQOL. 名古屋女子大学紀要 2005 ; 51 : 135.
- 11) Sigelman CK., Schoenrock CJ, Spanhel CL, et al. Surveying mentally retarded persons: responsiveness and response validity in three samples. *American Journal of Mental Deficiency* 1980 ; 84 (5) : 480-4.
- 12) Sigelman CK, Budd EC, Soanhel CL, et al. Asking questions of retarded persons: A comparison of yes-no and either-or formats. *Applied Research in Mental Retardation* 1981 ; 2 (4) : 355.
- 13) Heal LW, Sigelman CK. Response biases in interviews of individual with limited mental ability. *Journal of Intellectual Disability Research* 1995 ; 39(4) : 332-3.
- 14) Sigelman CK., Budd EC, Spanhel CL, et al. When in doubt, say yes: Acquiescence in interviews with mentally retarded persons. *Mental Retardation* 1981 ; 19(2) : 54.
- 15) Sigelman CK, Budd EC, Winer JL, et al. Evaluating alternative techniques of questioning mentally retarded persons. *American Journal of Mental Deficiency* 1982 ; 82(5) : 516.
- 16) 角田慰子, 池田由紀江. 知的障害者のライフスタイル満足度に関する研究 - 居住形態からの検討. *発達障害研究* 2002 ; 24(2) : 230-40.
- 17) Heal LW, Rusch JC. The lifestyle satisfaction scales (LSS) : Assessing individuals' satisfaction with residence, community setting, and associated services. *Applied Research in Mental Retardation* 1985 ; 6 (4) : 475-90.
- 18) 三田優子, 林弥生, 中里誠. 施設入所者の生活の場に関するニーズ調査研究. 厚生労働科学研究障害保健総合研究事業 知的障害者の利用者主体の地域生活 援助サービス推進に関する研究 平成14年度研究報告書 : 2003 ; 17.
- 19) Conroy JW, Elks MA. Tracking Qualities of life during deinstitutionalization: A covariance study. *Education and Training in Mental Retardation and Developmental Disabilities* 1999 ; 34(2) : 212-22.
- 20) 日本知的障害者福祉協会通勤寮部会. 本人アンケート調査の結果. 厚生科学研究障害保健福祉総合研究事業 知的障害者の入所施設から地域への移行に関する研究 平成11年度研究報告書 : 2000 ; 16-7.
- 21) Bank-Mikkelsen NE. ノーマライゼーション (normalization) の原理. 中園康夫訳. 四国学院大学論集 1978 ; 42 : 146.
- 22) Bengt-Nirje. ノーマライゼーションの原理. 河東田博・橋本由紀子訳. 四国学院大学論集 1996 ; 92 : 163.
- 23) Wolfensberger W. ノーマライゼーション - 社会福祉サービスの本質. 中園康夫・清水貞夫編訳. 学苑社, 1982 ; 48.
- 24) 中園康夫. ノーマライゼーション原理の研究 - 欧米の理論と実践 : 海声社, 1996 ; 39-40.
- 25) Bengt-Nirje. ノーマライゼーションの原理 - 普遍化と社会変革を求めて. 河東田博・橋本由紀子他編訳 : 現代書館, 1998 ; 102-4.